

受講者の自律的な実践を促す専門研修講座の 在り方に関する研究（二年次）

— 改善した「協議」や「振り返り」等を取り入れた研修講座の 実施及び検証を通して —

【研究者】

企画部 主任指導主事 脇谷 靖伸
指導主事 金子 京子・徳本 光哉
主 事 原田 衣織

【研究指導者】

広島大学大学院教育学研究科 准教授 米沢 崇

研究の要約

本研究は、教職員研修の一層の充実を求める国の動向を踏まえ、受講者の自律的な実践を促す専門研修講座の在り方を明らかにする研究の二年次である。研究の成果を専門研修講座において活用し、当教育センターの研修講座の改善を図ることを目的とする。

本研究における「自律的な実践」とは、「自ら立てた計画や目標に従って、所属校等での実践に活用すること」と定義する。一年次の研究において、自律的な実践を促すためには、大人の学びの特徴を踏まえ、受講者の内発的動機づけに着目し、「協議」及び「振り返り」を工夫して実施することや、「アクションプラン（行動計画）」（以下「アクションプラン」とする。）を作成すること等が、受講者の自律的な実践を促すことに有効であると考えた。

そこで、今年度は、改善した「協議」や「振り返り」等を取り入れた専門研修講座を実施し、その有効性を検証した。その結果、内発的動機づけにつながる四つの視点（「知的好奇心」「有能感」「自己決定」「関係性」）を取り入れて「協議」や「振り返り」を工夫して実施することや、自校（又は自身）の課題を明確にし、その解決に向けて「アクションプラン」を作成・交流すること等が、受講者の自律的な実践を促すことに有効であることが分かった。

目 次

はじめに	17
I 研究の目的と一年次の研究の概要	18
II 二年次の研究について	19
III 専門研修講座における実践	21
IV 検証と分析	25
V 受講者の自律的な実践を促す専門研修講座 の提案（改善案）	29
VI 研究の成果と今後の課題	31
おわりに	31
資料	33

はじめに

小・中学校学習指導要領の改訂告示が公示（平成29年3月）され、今後の教育の方向が示された。児童生徒の「主体的・対話的で深い学び」につながる授業づくりを実現するためには、教職員の資質能

力の向上が不可欠であり、教職員研修の担うべき役割は大きい。新学習指導要領の告示に先立ち、「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）」（平成27年、以下「答申」とする。）では、「新たな知識や技術の活用により社会の進歩や変化のスピードが速まる中、教員の資質能力向上は我が国の最重要課題であり、世界の潮流でもある。」¹⁾とし、教職員研修の一層の充実を強く求めている。また、教職員研修の在り方や手法等の見直しの必要性にも言及している。

本県教育委員会が推進する、広島版「学びの変革」アクション・プラン（平成26年12月策定）の実施に伴い、当教育センターは、受講者の主体的な学びと授業改善につながる研修講座を実施するため、講座内容等の改善に取り組んできた。平成28年度に実施した専門研修講座当日に実施する受講者アンケ

ートの肯定率は、理解度・有用度いずれも98%を超えていることから、受講者のニーズを満たす研修講座を実施できていると考える。

一方、一部の研修講座（全体の約25%）を対象にした事後アンケート（研修講座終了後1か月以上が経過したのちに実施）の結果等からは、研修における学びを所属校等において自律的な実践に活用できていない受講者が約5%存在することや、研修における学びを更に発展させた実践を行った受講者は1割に満たない実態が明らかとなった。また、実践に繋がっていない要因として、実践すべきことが具体化されていないことや学んだことを汎用的に活用できていないこと等が挙げられることも分かった。

当センターでは、研修事業等を実施する上での基本理念として「学びをつなぐ、できるにつなぐ」という組織コンセプトを設定している。研修講座を実施する目的は、教職員の研修における学びを、教職員自身の「できる（＝実践できる）」に繋ぎ、授業等の改善を通して、子どもたちの「できる」に繋ぐことである。そのため、受講者の自律的な実践を促す専門研修講座の更なる工夫改善に取り組む必要があると考える。

I 研究の目的と一年次の研究の概要

本研究は、受講者の自律的な実践を促す専門研修講座の改善策を提案することを目的とするものである。

一年次は、全ての専門研修講座に設定されている「協議」と「振り返り」に着目し、大人の学びの特徴や内発的動機づけ等についての文献研究を行うとともに、指導者と受講者を対象とした実態調査を実施し、分析・考察を行った。

一年次の研究の成果は、次の4点である。

- 大人の学びの特徴「P-MARGE」（表1）を踏まえるとともに、デシらの述べる内発的動機づけに着目し、「知的好奇心」「有能感」「自己決定」「関係性」の四つの視点（以下「四つの視点」とする。表2）を取り入れて講座内容を工夫・改善し実施することが、受講者の自律的な実践を促すことに繋がる。
- 自律的な実践を促す「協議」にするためには、指導者が協議の目的を達成させるために有効な協議のプログラムをデザインしておくこと（基本型を次頁図1に示す。）。その際には、協議のプログラムを構成する各セッション（プログラムを細かくデザインした一つの単位）を明

表1 大人の学びの特徴「P-MARGE」

P	Learners are Practical.	大人の学習者は <u>実利的</u> である。
現実の生活の課題を解決する学習が必要だと感じたとき、大人は学ぶ。		
M	Learner needs Motivation.	大人の学習者は <u>動機</u> を必要とする。
大人の学習には確固たる動機が必要である。その動機は自尊心や自己実現等の高次な欲求に絡み合っていることが多い。		
A	Learners are Autonomous.	大人の学習者は <u>自律的</u> である。
大人の学習は自発的で、かつ自己決定的な性格をもっている。		
R	Learner needs Relevancy.	大人の学習者は <u>関連性</u> を必要とする。
学ぶべき内容に自己との関連性を見出せない時、大人は学ぼうとしない。関連性を見出すのは仕事で与えられた役割を全うしようと思うとき等が多い。		
G	Learners are Goal-Oriented.	大人の学習者は <u>目的志向性</u> が高い。
大人の学習は問題解決的であり、目的志向的である。		
E	Learner has life Experience.	大人の学習者は <u>豊富な人生経験</u> がある。
大人の学習は、これまでに経験したことに影響を受ける。		

表2 内発的動機づけにつながる「四つの視点」

知的好奇心	新しいことを学ぶこと自体に感じる面白さや興味、やることの意義・価値・重要性、興味深さ。
有能感	自分はできる能力があると感じることへの欲求、課題解決を図る力が自分にはあると感じることができる。
自己決定	自分で選び、決めることができる。自分でやろうと思って始め、終わりを自分で決めることができる。
関係性	他人と互いに尊重し合える関係を結びたい、愛情や尊敬を受けるに値する存在でありたいという欲求、教職員集団の中で課題解決に向けた役割を果たすことができる。

確にしておくことが大切である。そのために、セッションのねらいを「導入」「インプット」等の短い言葉で表現しておくとともに、「成果」又は「関係性」という、二つの点のいずれか（又は両方）のねらいを明確に示しておくこと（記述例を次頁表3に示す。）が必要である。なお、セッションのねらいにある「関係性」とは、次頁に示しているように、講座に参加する受講者同士の関係性についてのことであり、「四つの視点」の中の「関係性」に比べ、限定的な場面におけるものと捉える。

体験学習型のプログラム	
①	体験する（全員が同じ体験（演習）を行う）
②	指摘する（自分や周囲で起こったことを指摘し合う）（体験の過程で起こった関係性や心理的なプロセスの変化を対話を通じて見付け出して、学習の素材とする）
③	理由や原因を分析する（「なぜ、そうなったのか」「それはどこからきたのか」分析する）
④	学習を概念化する（「こういう理屈ではないか」という仮説が見つかったら実践で使える教訓や法則として「概念化」（一般化）していく）

問題解決型のプログラム	
①	問題を共有する（現状とあるべき姿のギャップを明らかにして、何が問題なのかをしっかりと共有できるようにする）
②	原因を探索する（原因を探索しないと本質的な課題解決にならない。なぜ？を繰り返しながら、問題をとことん深掘りする）
③	解決策を立案する（ありとあらゆる打ち手を考えることが大切）
④	意思を決定する（全員が一致できる合理的な基準をつくり最良の案を選ぶ）

図1 協議のプログラムの基本型

表3 セッションのねらいの記述例

セッションのねらい	詳細法	
	①成果のねらい	②関係性のねらい
導入	今日何をするかを皆が理解する。	メンバーがお互いを知る。
インプット	問題を提起し、必要な情報を共有する。	活発に討議できるようにする。
解決策発散	考えられる解決策をなるべく多く出す。	—
意思決定	どれを実行するかを決める。	全員が当事者として決意する。
振り返り	今日話し合っただけの内容を確認する。	感想を通じて納得感、一体感を高める。

①「成果」のねらい（何をアウトプットとして出すのか） 意識を合わせる、問題を提起する、体験をする、考え方を理解する、可能性を洗い出す、成果を確認する等
②「関係性」のねらい（参加者の関係性をどのようにしたいのか） 互いを知る、考え方を知り合う、一体感を高める、本音を出させる、相違点を発見する等

「成果」と「関係性」のねらい

- 「協議」を活性化させ、思考の質や成果を高めるためには、協議の目標や目的を明確にし、何

をどのように発言すればよいかを理解して協議に参加できるようにしておくことが大切である。そのためには、質問文で協議テーマを設定するとともに、答えやすい問いから深く考える問い（問いの例を表4に示す。）へと展開する等、問いを工夫することが必要である。

表4 協議における問いの例

答えやすい問い ↓ 深く考えさせる問い	項目	問いの例
1	事実・経験	どんなことがあったか？ 何を見たか？ 何をしたか？
2	感想・感情	どう感じたか？ 今、どう思っているか？
3	思考・考察	なぜそう感じるのか？ 何がポイント、問題か？
4	価値観・原理	何が学べるか？ 結局一番大切にしたいものは何か？
5	決意・行動	明日から生かしたいことは何か？ 何が必要か？

- 振り返りにおいて、受講者が職場に戻ったときに何に应用するか意識させ、その実行を約束してもらうための意思表示・遂行支援ツールとして「アクションプラン」を作成し活用することや、作成後に受講者同士で交流させることが、自律的な実践を促すために必要である。

これらの4点を踏まえ、受講者の自律的な実践を促すための専門研修講座の改善方を提案した。

II 二年次の研究について

今年度実施した専門研修講座（140講座）のうち、19講座について、「協議」や「振り返り」等に工夫を取り入れて実施するとともに、研修指導者対象の事後アンケート、受講者対象の事後アンケートを実施し、手立ての有効性を検証することとした。

1 「協議」や「振り返り」等に工夫を取り入れた専門研修講座の実施に向けて

(1) 「四つの視点」を踏まえた工夫等について

一年次の研究成果を反映させた専門研修講座の実施に向け、研修指導者の共通理解を図るために、工夫のポイントをまとめた資料（資料①参照）を作成し、研修指導者対象の説明会を実施した。

まず、本研究で定義する「自律的な実践」や「講座の中で目指す協議」について、次のとおり共通確認した。

自ら立てた計画や目標に従って、所属校等での実践に活用すること

※「所属校等での実践に活用する」とは、個人の実践、学校全体としての実践（校内の研修・実践へ還元）に活用すること

本研究で定義する「自律的な実践」

学校現場の日々の課題が持ち込まれ、その解決に向け、受講者が知識や経験、専門性を認め生かし繋ぎ解決しようとし、その解決策を明日の実践に生かすこと

「講座の中で目指す協議」

次に、受講者の自律的な実践を促すと考えられる「四つの視点」（前々頁表2）を踏まえて「協議」や「振り返り」を工夫すること等について、具体例を示した資料を併用して説明し、各々の研修講座における適切な場面で工夫を行うよう依頼し、協議をデザインする手順を説明した。

① 協議テーマを設定する。その際、質問文の形式で問い、答えやすい問いから深く考えさせる問いへと展開する。

② 協議のプログラムの基本型（問題解決型等）を基に、「成果」「関係性」のいずれかが各セッションのねらいとなるようデザインする。

③ 各セッションのねらいを短い言葉で分かりやすく明確に示す。

④ 協議の最後に必ず「振り返り」を設定する（「アクションプラン（行動計画）シート」（以下「アクションプランシート」とする。）の「各コマのメモ欄」に記入する）。

⑤ 一日の研修のまとめとしての「振り返り」の中で「アクションプラン」を作成し、妥当性を比較吟味するための交流時間を設ける。

協議をデザインする手順

(2) 「アクションプランシート」について

受講者が研修講座において記入する「アクションプランシート」（資料②参照）を作成し、指導者に研修講座での活用を依頼した。

このシートは「いつ、誰が、誰と、何のために、

何をどのように、どこまで」等、具体的な「アクションプラン」を記述するものである。また、「解決すべき課題」を明らかにした上で、研修受講中、「アクションプラン」に生かせると感じたことを自由に書き留めることができるよう工夫した。

研修講座のオリエンテーションから、受講者に「アクションプラン」の作成を意識させるとともに、研修のまとめとしての「振り返り」において「アクションプラン」を作成することや、作成したプランの妥当性を比較吟味するための交流の時間を設ける等、シートの使用方法についての共通理解を図った。

受講者が作成した「アクションプランシート」については、研修終了時にコピーしたり、ICT機器を使って画像として保存したりなどすることにより、研修受講状況に係る情報収集を行った。

2 意識調査について

(1) 「アクションプランシート」における調査

「アクションプランシート」（資料②参照）に、「四つの視点」に係る研修終了時の受講者の意識を把握するための質問項目（4段階尺度）と、実践意欲の向上につながるものは何かについての質問項目（記述式）を設定した。

(2) 受講者対象の事後アンケートについて

研修講座に取り入れた工夫が、受講者の自律的な実践につながったのかを把握するため、研修後1か月以上経過した後、事後アンケート（資料③参照）を実施した。

調査には、研修内容の活用状況に加え、自律的な実践に向けて、工夫して実施した「協議」や「振り返り」が有効であったかどうかについての受講者の意識を把握するための調査項目を設定した。

(3) 指導者対象の事後アンケートについて

指導者を対象に、研修講座において各指導者がどのように「協議」をデザインしたのか、「四つの視点」に係って工夫した点や有効だと感じた点、課題である（難しい）と感じたことについて把握するため、事後アンケート（資料④参照）を実施した。

(4) 検証の視点

検証の視点	検証方法
専門研修講座において実施した「協議」「振り返り」等における工夫が、受講者の自律的な実践を促すことに繋がったか。	○受講者が記入した「アクションプランシート」の分析 ○受講者を対象とする事後アンケートの分析 ○指導者を対象とする事後アンケートの分析

Ⅲ 専門研修講座における実践

1 特徴的な実践事例

次頁表 6 に示す19の専門研修講座において実践した。この19講座のうち、16講座において問題解決型のプログラムをデザインしていた(表5)。また、取り入れたコマの形態をみると、「協議」「演習・協議」「講義・協議」という形態が多いが、「講義・演習」「演習」のような形態もあった。様々な形態の中に、受講者が協議する場面が設定されており、その中で、指導者による「協議」や「振り返り」等での工夫が見られた。そのうち、以下の4講座について、協議の特徴とデザインした協議のプログラムや講座の流れを示す。

表5 実践した協議のプログラムの種類と講座数

問題解決型	体験学習型	その他
16講座	1講座	2講座

○ 教育法規「基礎から学べる！スクールコンプライアンスの確立と教育法規」講座

【協議の特徴と工夫点】

所属校の現状と課題を整理した後、グループで問題点を発見・整理し、グループで決めた共通課題について、原因と解決策を協議した。

【協議の実施状況】

グループで原因や解決策を考えるようにしたことで、受講者のこれまでの経験や知識を出し合うことができ、有能感を高めることに繋がっていた。また、職種別のグループ編成をしたことで、校内での役割を踏まえて協議することができ、自校の課題解決に向けて、自身がどのような役割を担い、取組を行うことができるか具体的に考えることができていた。グループ協議後の交流では、他のグループの良い点やアドバイスを伝えるようにしたことで、知的な好奇心や有能感が高まっていた。

【協議のプログラム】

各セッションのねらい	成果と関係性のねらい	協議の流れと留意点(四つの視点)
導入(ゴールの確認) 5分	成果・意識を合わせる。	<ul style="list-style-type: none"> ●協議(問題解決型)のゴールとプロセスの確認 【協議のゴール】所属校の課題を法的な視点から捉え、所属校のスクールコンプライアンスの確立に向けた現状と課題について協議し、今後の実践に生かす。 【テーマ】信頼される学校運営や教育活動を行うためには、どのような取組をすればよいだろうか？

現状認識 5分	成果 ・問題を提起し、必要な情報を共有する。	法的な視点から捉えた所属校の現状と課題を挙げる。
原因探索 解決策立案 25分	・考えられる解決策を多く出す。 ・どれを実行するか決める。	課題をグループで交流し、グループの共通課題を決め、共通課題(こつて、原因と解決策を協議する。(有能感、関係性)
意思決定 10分	関係性 ・本音を出させる。 ・協働的に解決策を考える。	発表し、質疑応答を行う。 ・他のグループの良い点やアドバイスを伝える。(知的な好奇心、有能感)
振り返り 10分	成果 ・成果を確認する。	※「アクションプラン」のメモ欄に記入する。

↓
研修のまとめとしての「振り返り」…「アクションプラン」の作成→交流

【講座の流れ】 ※Ⅱ期の太線枠囲みが該当する協議

ねらい	スクールコンプライアンスの確立に向けて、日常の教育現場や教職員の役割と教育法規との関連について、今日的な教育課題を含む具体的な事例を基に理解を深め、信頼される学校運営や教育活動を行うことができる力を身に付ける。	
Ⅰ期	日時	平成30年6月11日(月) 9:00受付開始
	会場	教育センター
形態	内容	内容の説明
	オリエンテーション	
9:30		
9:40	講義 演習	スクールコンプライアンスの確立と教育法規について 研経大学 教育学部長 教育学部 教授 樋口 修貴
		スクールコンプライアンスの確立に向けて、リーガルマインドの必要性、信頼される学校づくりと教育法規との関連について、講義と演習を通して理解を深めます。
12:00	昼食・休憩	
13:00	協議 協議	教育法規の必要性と仕組みについて 教育センター 企画部 指導主事
		教育法規の必要性、仕組みや体系を理解するとともに、事例課題についての協議及び解決を通して、日本の教育現場に活用する法規の基礎的内容を学びます。
14:10	演習 協議	教育現場に関する事例研究 教育センター 企画部 指導主事
		事例実況及び協議を通して、具体的な教育活動における法的な問題点について考察し、関係する法規についての理解を深めます。
16:30	研修のまとめと振り返り	
16:45		
Ⅱ期	日時	平成30年7月23日(月) 9:00受付開始
	会場	教育センター
形態	内容	内容の説明
	オリエンテーション	
9:30		
9:40	講義 演習	スクールコンプライアンスの確立に向けた取組の実践 広島県教育委員会 学校経営支援課 研修指導主事
		学校運営の観点からコンプライアンスの重要性を学ぶとともに、信頼される学校づくりに向けた視点や方法について、実際の取組を基に学びます。
10:50	演習 協議 協議	教職員の職務に関する事例研究 広島県教育委員会 教職員課 小中学校入事係 管理主事 県立学校入事係 管理主事
		実務問題を通して、教職員の職務等に関する法的な問題点について考察し、関係する法規についての理解を深めます。
12:00	昼食・休憩	
13:00	演習 協議 協議	教職員の職務に関する事例研究 広島県教育委員会 教職員課 小中学校入事係 管理主事 県立学校入事係 管理主事
		午前の内容を引き続き学びます。
15:30	協議	スクールコンプライアンスの確立に向けて 教育センター 企画部 指導主事
		所属校の課題を法的な視点から捉え、所属校のスクールコンプライアンス確立に向けた現状と課題について協議し、今後の実践に生かします。
16:30	研修のまとめと振り返り	
16:45		

表6 「協議」や「振り返り」等に工夫を取り入れた専門研修講座一覧

講座番号	講座名	該当コマの形態(時間)	該当コマの内容	設定した協議テーマ	受講者数(人)
107	高等学校国語科「古典嫌いにさせない！生徒が主体的に学ぶ授業づくり」講座	講義(50分) 演習・協議(165分)	国語科教育の現状と課題ー古典を扱う学習指導についてー 生徒が主体的に学ぶ授業づくり	古典嫌いにさせないためにはどのような授業をすればよいだろうか？	19
110	算数科「児童の実態から考える授業づくり」講座	演習・協議(155分)	児童の実態から考える指導法の工夫・改善	児童の実態から考える授業づくりのためにどのような指導の工夫が考えられるか？	49
129	小学校家庭科「ここがポイント！家庭科指導ははじめの一步(製作実習)」講座	講義・演習(110分)	新学習指導要領に対応した2学年間の家庭科の指導計画について	学習指導要領で示されている衣生活の内容を2学年間で指導するために、どんな工夫ができるだろうか？	6
143	特別活動「基礎から学ぼう！学級活動の進め方」講座	演習・協議(85分)	特別活動を効果的に進めるプラン	生活や人間関係づくりのために合意形成できる児童生徒を育成するためにはどうすればよいか？	24
147	へき地教育「自ら学ぶ！深く考える！複式学級指導の授業づくり」講座	協議(40分)	これからの実践に向けて	主体的な学習にするために、何をどのようにしていくか？	11
148	キャリア教育「個々のキャリア発達を促す！キャリア・カウンセリング」講座	演習・協議(105分)	個々の発達を踏まえたキャリア・カウンセリング	幼児児童生徒のキャリア発達を促すキャリア・カウンセリングとは？～自分の強みと弱みを知り、進め方を理解しよう～	35
150	国際教育「相互理解、多様性の受容につなぐ授業づくり」講座(JICA連携)	演習・協議(140分)	参加型学習を生かした授業の計画と交流	主体的な学習にするために、何をどのようにしていくか？	38
154	特別支援教育「特別支援学級における知的障害のある児童の授業づくり(小学校)」講座	講義・協議(135分)	小学校特別支援学級における授業づくりの工夫	知的障害のある児童生徒が「主体的に学ぶ」ための指導・工夫をどのように行えばよいか？	20
155	特別支援教育「特別支援学級における知的障害のある生徒の授業づくり(中学校)」講座	講義・協議(135分)	中学校特別支援学級における授業づくりの工夫	知的障害のある児童生徒が「主体的に学ぶ」ための指導・工夫をどのように行えばよいか？	8
157	健康教育「養護教諭が行う効果的な保健教育の進め方」講座	協議(30分)	保健教育に係る各校の取組	保健教育を効果的に進めるためには、どのような取組をすればよいだろうか？	57
160	生徒指導・教育相談「基礎から学ぼう！児童生徒の心に寄り添う指導」講座	協議(50分)	児童生徒理解に基づいた各校の取組	児童生徒理解に基づいた教育活動を行うためには、どのような取組をすればよいだろうか？	44
161	生徒指導・教育相談「感情と上手に付き合おう！感情のコントロール」講座	協議(50分)	感情をコントロールする力の育成に係る各校の取組	どうすれば、所属校の児童生徒の感情のコントロールに係る課題が解決できるか？	83
162	生徒指導・教育相談、健康教育「子供を守る！レジリエンスの育成～理論編～」講座	協議(30分)	レジリエンスを育成する各校の取組	どうすれば、所属校の児童生徒にレジリエンスを育成することができるか？	70
211	高等学校理科「科学的に探究する能力を育成する授業づくり」講座	演習・協議(210分)	科学的に探究する能力を育成する単元指導計画の改善	科学的に探究するために必要な資質・能力をよりよく育成するには、どのように学習指導案を改善すればよいか？	7
213	音楽科、芸術科(音楽)「進めよう！主体的・対話的で深い学びを促す授業づくり」講座	演習(210分)	主体的・対話的で深い学びを促す題材指導計画の作成	主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を進めるためには、どのような場面を設定すればよいだろうか？	17
240	教育の情報化「主体的な学びを活性化！ICTを活用した授業づくり(小学校)」講座	演習・協議(60分)	主体的な学びを促すICT活用	課題発見・解決学習における効果的なICT活用とは？	13
308	教育法規「基礎から学べる！スクールコンプライアンスの確立と教育法規」講座	協議(50分)	スクールコンプライアンスの確立に向けて	信頼される学校運営や教育活動を行うためには、どのような取組をすればよいだろうか？	18
312	学校経営「信頼される学校であるために！不祥事防止」講座	演習・協議(55分)	不祥事防止に向けた主体的・実践的な研修の実施に向けて	各所属校において不祥事を防止するために、具体的にどのようなことを行えばよいだろうか？	23
421	学校事務「教育活動を充実させる！財務マネジメント」講座	演習・協議(140分)	教育活動を充実させるために	適切に予算執行するためにはどうしたらよいだろうか？	41

○ 高等学校国語科「古典嫌いにさせない！生徒が主体的に学ぶ授業づくり」講座

【協議の特徴と工夫点】

古典を扱った授業における現状を認識させ、個人で解決策の仮説を立てた後、参観授業から得たことを踏まえ、グループで一つの解決策を立案した。その後、他のグループと交流し、元のグループで解決策を見直した後、解決策の提言を行い、個人で振り返りを行った。

【協議の実施状況】

現状を認識させる際に、事前アンケートの回答結果を一覧にし、参加者全員の考えを視覚的に捉えられるようにしたことで、受講者の興味・関心が高まり、知的好奇心を高めることに繋がった。また、授業を参観する前に、自分なりに課題解決のための仮説を立てさせたことで、受講者が自律的に解決策を考えることができた。

【協議のプログラム】

各セッションのねらい	成果と関係性のねらい	協議の流れと留意点 (四つの視点)
導入 2分	関係性 ・互いを知る。	●講義、演習・協議 (問題解決型) のゴールとプロセスの確認 【協議のゴール】古典嫌いの原因について共通認識をもち、改善のための学習指導につれて仮説を立てる。
現状認識 原因探索 5分	関係性 ・本音を出す。 ・共通認識をもつ。 成果 ・古典嫌いの原因について共通の認識をもつ。	古典嫌いの現状を認識する。 ・協議前の講義、事前アンケートの集約結果及び自校の実態を基に、古典嫌いの原因を整理する。 (知的な好奇心)
解決策の仮説を立てる 13分	成果 ・自分なりの仮説を立てることに繋がる。	解決策の仮説を立てる。 ・現状認識を踏まえて、実現可能かどうかは別として仮説の案を出す。 (自己決定)
解決策の仮説を立てる 5分	成果 ・自分なりの仮説を立てる。	解決策の仮説を立てる。 ・協議を踏まえて、自分なりの仮説を立てる。 (有能感、自己決定)
参観授業の実施		
解決策立案 70分	関係性 ・協働的に解決策を考える。 成果 ・グループで解決策を立案する。	解決策を立案する。 ・各自の仮説を突き合わせ、参観授業から得たことを踏まえて、グループで一つの指導計画を作成する。ただし、完成度は6割でよいとする。 (有能感)
解決策の見直し 40分	成果 ・曖昧であったところや、不十分な部分に助言を受ける。	解決策について意見をもらう。 ・グループに一人が残り、その他の構成員は別のグループと交代。残った一人が、指導計画の意図を説明し、他グループから来た者が指摘や助言をする。 (有能感)
	成果 ・解決策をより精度の高い物にする。	解決策の練り直しを行う。 ・元のグループに戻り、他のグループ員から受けた指摘・助言を踏まえて、再度指導計画を検討し、修正する。 (有能感、自己決定)
解決策提言 20分	関係性 ・各自がグループの代表として自覚をもつ。 成果 ・解決策の意図や価値をグループ全員がもつ。	解決策の提言を行う。 ・グループに一人が残り、その他の構成員は別のグループと交代。残った一人が、指導計画の意図や価値を説明し、質疑に応える。残って説明する一人を交代して、3セット行う。 (知的な好奇心、有能感)

振り返り 10分	成果 ・成果を確認する。	※「アクションプラン」のメモ欄に記入する。
-------------	-----------------	-----------------------

↓
研修のまとめとしての「振り返り」…「アクションプラン」の作成→交流

【講座の流れ】 ※太線枠囲みが該当する協議

ねらい	生徒が主体的に学ぶ授業づくりについて、講義、参観授業、協議、演習を通して理解を深め、指導力の向上を図る。		
日時	平成30年6月26日(火)	9:00受付開始	会場 三次高等学校
形態	内容	内容の展開	
9:30	オリエンテーション		
9:40	講義 国語科教育の現状と課題—古典を扱う学習指導について— 教育センター 教科教育部 指導主事	高等学校国語科の古典を扱う学習指導に今後求められることについて、国や自身の授業を踏まえて理解します。	
10:30	参観 協議 生徒が主体的に学ぶ授業の実態 高等学校 全日制 数語 教育センター 教科教育部 指導主事	生徒の主体的な学びを促す授業の在り方について、参観の授業や事後協議から具体的に学びます。	
12:30	昼食・休憩		
13:30	演習 協議 生徒が主体的に学ぶ授業づくり 教育センター 教科教育部 指導主事	午前の講義や授業、協議を踏まえて、生徒が主体的に学ぶことができるような学習指導の案をグループで作り、実践につながる授業づくりのポイントを学びます。	
14:15	研修のまとめと振り返り		
14:30			

○ 国際教育「相互理解、多様性の受容につなぐ授業づくり」講座

【協議の特徴と工夫点】

講座内容を振り返り、研修した内容を授業の中で具体的に今後どのように生かすかという授業計画 (学習指導案) を立て、グループ内で交流した。その後、個人で授業計画を修正し、振り返りを行った。

【協議の実施状況】

これまでの講義や演習、協議の内容を振り返らせることで、国際教育の意義や重要性を再確認することができ、受講者の知的好奇心を高めることに繋がった。グループ内の交流では、実現可能性を高めるためのアドバイス等を伝えるようにしたことで、より実現可能な授業計画を具体的に作成することが出来、是非やってみた、これなら出来そうだという思いを受講者にもたせることが出来ていた。

【協議のプログラム】

各セッションのねらい	成果と関係性のねらい	演習・協議の流れと留意点 (四つの視点)
導入 (ゴールの確認) 5分	成果 ・意識を合わせる。	●演習・協議 (問題解決型) のゴールとプロセスの確認 【演習・協議のゴール】自己の実践に生かしたいことを考えるとともに、交流することを通して、今後の授業実践に生かす。 【テーマ】主体的な学習にするために、何をどのようにしていくか?

現状認識 解決策の立案 意思決定 125分	関係性 ・考え方を知り合う。 ・本音を出させる。 ・相違点を発見する。	今までの講義、協議、演習を振り返る。 (知的好奇心)
		授業の計画(学習指導案)を作成する。 ・いつ、だれと、どのように行うのかを明確にする。 (自己決定、関係性)
		自分の計画案をグループ内で交流する。 ・何をどのようにしていきたいかを伝える。 ・実現可能にするためにアドバイス等をする。 (有能感、自己決定、関係性)
		グループで考えたことを交流する。 (有能感、関係性)
振り返り 10分	成果 ・成果を確認する。	※「アクションプラン」のメモ欄に記入する。

↓
研修のまとめとしての「振り返り」…アクションプランの作成→交流

【講座の流れ】 ※Ⅱ期の太線枠囲みが該当する協議

ねらい	グローバル人材の育成に向けて、ESD(持続可能な開発のための教育)に基づく国際教育について理解し、児童生徒の主体的な学びにつながる参加型学習を生かした授業づくりの実践的指導力を身に付ける。	
I期 日時	平成30年8月1日(水)	9:00受付開始 会場 ひろしま国際プラザ
8:30	形態	内容 内容の説明
8:40	オリエンテーション	
9:40	講義	グローバル人材の育成に向けた取組について 姉妹校交流、海外留学など 異文化間協働活動やグローバル人材の育成に向けた施策の具体について理解し、今後の実践に生かします。
10:40	協議	広島県教育委員会 学びの革新推進課 学びの革新推進担当 指導主事
10:50	協議	ESDに基づく国際教育の考え方や授業づくりの理由 ESDに基づく国際教育の考え方や授業づくりについて理解するとともに、日常の教育活動における進め方と、その理由について学びます。
12:00	協議	教育センター 企画部 指導主事
12:00	昼食・休憩	
13:00	報告協議	グローバルに活躍できる児童生徒を育成するための取組 在外教育施設での教育実践経験者から、グローバルな視点をもった児童生徒を育成するための理由を学びます。
14:00	協議	小学校 英語 中学校 英語 教育センター 企画部 指導主事
14:20	協議	これまでの実践についての交流と振り返り 受講者の所属校における実践をグループで交流し、今後の授業づくり等の取組に生かします。
15:30	協議	教育センター 企画部 指導主事
15:40	協議	ESDに基づく国際教育の実践方法 ESDに基づく国際教育の実践方法について、参加型学習の体験を通して学び、相互理解と多様性の受容につながる授業づくりを生かします。
16:40	協議	JICA中国 職員 教育センター 企画部 指導主事
16:40	研修のまとめと振り返り	
II期 日時	平成30年8月2日(木)	9:00受付開始 会場 ひろしま国際プラザ
8:30	形態	内容 内容の説明
8:40	オリエンテーション	
9:40	協議	ESDに基づく国際教育の実践方法 ESDに基づく国際教育の実践方法について、参加型学習の体験を通して学び、相互理解と多様性の受容につながる授業づくりを生かします。
12:00	協議	JICA中国 職員 教育センター 企画部 指導主事
12:00	昼食・休憩	
13:00	協議	ESDに基づく国際教育の実践方法 午前の内容を引き続き学びます。
14:00	協議	JICA中国 職員 教育センター 企画部 指導主事
14:10	協議	参加型学習を生かした授業の計画と交流 参加型学習の考え方や進め方を生かしたESDに基づく国際教育の授業を計画し交流することで、今後の実践に生かします。
16:30	協議	JICA中国 職員 教育センター 企画部 指導主事
16:40	研修のまとめと振り返り	

○ キャリア教育「個々のキャリア発達を促す！
キャリア・カウンセリング」講座

【協議の特徴と工夫点】

役割分担に基づきロールプレイ・気付きの交流を行った後、個人でキャリア・カウンセリングのポイントを整理し、グループで交流することを通して、キャリア発達を促すキャリア・カウンセリングの進め方を理解させる。最後に演習・協議を通しての振り返りを個人で行い、交流した。

【協議の実施状況】

1 グループ4人のメンバー構成をする際に、事前アンケートから経験年数等を把握し、様々な立場から気付きの交流や振り返りができるように工夫したことで、受講者の有能感や関係性が高まっていた。また、「自分の強みと弱み」という視点でキャリア・カウンセリングの進め方のポイントを整理したことで、受講者が自分事として捉えることができ、自己決定に繋がっていた。

【協議のプログラム】

各セッションのねらい	成果と関係性のねらい	演習・協議の流れと留意点(四つの視点)
導入 (ゴールの確認) 5分	関係性 ・互いを知る。	●演習・協議(体験学習型)のゴールとプロセスの確認 【演習・協議のゴール】ロールプレイ(担当者(教師)、児童生徒、観察者)で全ての役割を経験し、そのロールプレイでの気付きの交流を通して、幼児児童生徒のキャリア発達を促すキャリア・カウンセリングの進め方を理解する。 【演習・協議の流れ】 ①4人1組となり、まず担当者(教師)を決める。その右隣が、児童生徒、その他2名が、観察者。 ②ロールプレイを5分間行う。観察者は記録用紙に記録。担当者(教師)、児童生徒、観察者の順で、気付きを出し合う。 ※15分を1クールとし、時計回りでローテーションする。 ③全てが終了したら、キャリア・カウンセリングの進め方のポイントを整理する。
インプット 5分	成果 ・意識を合わせる。	テーマを確認する。 【テーマ】 幼児児童生徒のキャリア発達を促すキャリア・カウンセリングとは?～自分の強みと弱みを知り、進め方を理解しよう～
自己理解及び他者理解 15分×4回	成果 ・ロールプレイを行うことにより、主観的・客観的に自分の強みと弱みを把握できる。	役割分担に基づき、ロールプレイを行い、気付きを共有し、各自の気付きから自分の強みと弱みを把握する。(担当者(教師)→児童生徒→観察者) (知的好奇心) ※自分では当たり前と思っていたり、よさと思っていなかったりするものにも価値があることに気付く。(有能感、関係性)
ポイント整理 15分	成果 ・進め方を理解し、自分が取り組もうとするポイントを伝える。	個人思考後、グループで協議したキャリア・カウンセリングの進め方のポイントをまとめ、自分が取り組もうとするポイントを紹介する。(有能感、自己決定)

振り返り 20分	成果 ・成果を確認する。	演習・協議を通しての振り返り (個人→グループ) ※「アクションプラン」のメモ欄に記入する。
-------------	-----------------	--

↓
研修のまとめとしての「振り返り」…「アクションプラン」の作成→交流

【講座の流れ】 ※太線枠囲みが該当する協議

ねらい 幼児児童生徒のキャリア発達を促し、行動や意識の変容につながることを意識して働きかけるキャリア・カウンセリングを行うための知識や実践的な技能を身に付ける。		
日時	平成30年8月21日(火) 9:00受付開始	会場 教育センター
9:30	オリエンテーション	内容の説明
9:40	キャリア教育に求められるもの	学校の教育活動全体を通じて行うキャリア教育に求められるものについて理解します。
11:00	広島大学大学院 教育学研究科 教授 沢玉 真樹子	
11:10	キャリア発達とキャリア発達課題について	幼児児童生徒のキャリア発達とキャリア発達課題について理解します。
12:00	教育センター 企画部 指導主事	
12:30	昼食・休憩	
13:00	個々の発達を踏まえたキャリア教育	幼児児童生徒が将来自立して生きていくために自分の生き方を見つめ、主体的に考えられるよう、個々の発達を踏まえた働きかけについて理解します。
14:15	教育センター 企画部 指導主事	
14:30	個々の発達を踏まえたキャリア・カウンセリング	幼児児童生徒のキャリア発達を促すキャリア・カウンセリングの進め方を理解します。
16:15	教育センター 企画部 指導主事	
16:45	研修のまとめと振り返り	

2 「四つの視点」に係って工夫した点

「協議及び協議における『振り返り』」及び「研修のまとめとしての『振り返り』」に焦点を絞り、指導者が、「四つの視点」に係って工夫した点を表7及び表8に示す。

表7、表8から、事前アンケートやオリエンテーション、1コマ目等、講座前や講座の冒頭に、自己の課題を明確にしておく工夫や、「協議」に入る前に、個人思考の時間を確保しておく工夫、講座の最後に課題を解決するための「アクションプラン」を作成することを念頭におき、終日の講座内容で参考となる点をメモし、それを活用して「アクションプラン」を作成する工夫、協議するグループ編成や「アクションプラン」の交流のもち方等の工夫をしていることが分かる。

IV 検証と分析

「協議」や「振り返り」等に工夫を取り入れた専門研修講座の有効性を検証するために、表6に示す19講座の受講者583人を対象として、「アクシ

表7 「協議」及び「協議における『振り返り』」において工夫した点

視点	工夫した点
知的 好奇心	・事前アンケートを課し、各自の課題意識を言語化することによって、研修内容への関心が高まるようにし、振り返りにおいても想起させた。
有能感	・自校の現状と課題を整理した後で、グループで一つの共通課題に絞り、その原因と課題解決に向けた取組を協議することで、自分でもできそうだと感じさせることができるようにした。
自己決定	・授業を参観する前に、自分なりに課題解決のための仮説を立て、自律的に解決策を考えるようにした。 ・協議に入る前に、自分の考えを整理するための個人思考の時間を確保した。
関係性	・事前アンケートから経験年数等を把握し、4人1グループとした。様々な年齢層の教職員がいることを想定し、様々な立場から「振り返り」ができるようにメンバー構成を工夫した。また、単調な演習・協議とならないように気付きの交流順を設定した。 ・教職員集団の中で自身が果たすべき役割を踏まえて協議できるように、職種別のグループ編成とした。

表8 「研修のまとめとしての『振り返り』」において工夫した点

視点	工夫した点
知的 好奇心	・事前アンケートにより、自己の課題を見つめる機会を設けた。また、それを意識して受講させるとともに、振り返りにおいても想起させた。 ・1コマ目において、「研修のまとめとしての『振り返り』」の中で、「アクションプランシート」を作成することを説明し、シートの作成を意識させるとともに、講義や実践報告の中から、課題解決に向けた参考となる点をメモし、それを活用してシートを作成させた。
有能感	・作成した「アクションプラン」の内容を、「私の宣言」としてペアで伝え合う時間をとった。
自己決定	・振り返りの前に、学校での実践に際し妨げになりそうなことと、その対処方法のレクチャーを行い、自律的な実践に向けた不安を少しでも解消するようにした。
関係性	・できるだけ多くの受講者と交流して、課題解決に向けて自らの役割を果たすための多くの情報を共有できるように、グループをいろいろ変えて協議させた。

ンプラン」の作成と研修講座終了時のアンケート及び事後アンケート（3～4か月後に実施）を、指導者19人を対象として、指導者アンケートを実施した。

1 受講者アンケートについて

(1) 研修講座終了時

検証講座において、「四つの視点」に関する項目を設定し、講座終了時に意識調査を実施した。

「四つの視点」に係わる意識調査の項目を次頁表9に示し、その結果を次頁図2に、受講者が「アクションプラン」作成に役立ったと回答した講座内容等の結果を次頁図3に示す。

表9 「四つの視点」に係わる意識調査の項目

四つの視点	意識調査の項目
知的的好奇心	自校での今後の実践に向け、本研修の内容は興味深く重要なものであった。
有能感	自校（又はあなた）の課題を自分達で力で解決できそうだ。
自己決定	自校（又はあなた）の課題の解決に向けて、今後の実践内容や行程等を自分なりに決めることができた。
関係性	今後、教職員集団の中で、他者と協働し、課題解決に向けた自らの役割を果たせそうだ。

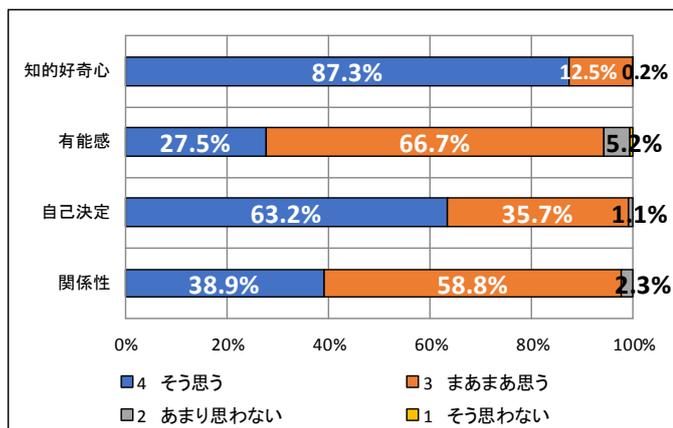


図2 受講者の「四つの視点」に関する意識 n=532

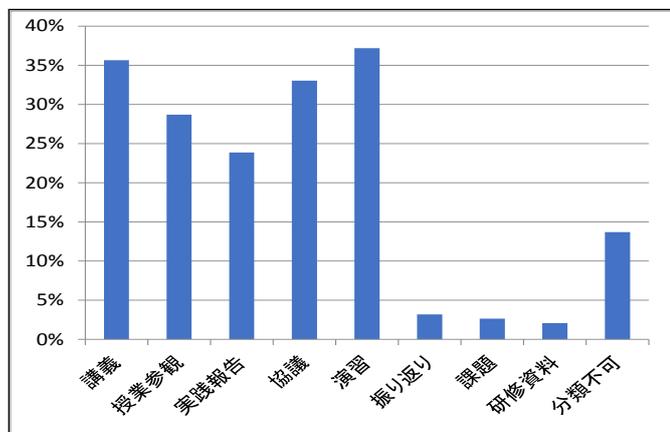


図3 「アクションプラン」作成に役立った講座内容等 n=533 (複数回答)

図2から、どの項目も受講者の94%以上が肯定的（4又は3）に回答していることが分かる。これは、講座担当者が専門研修講座の実施に係って、表7や表8に示したように、「四つの視点」による工夫をしたため、受講者が講座を通して、今後の実践に向け、研修内容が興味深く重要なものであると感じたり、自分なりに実践内容等を考えたりすることができたからだと思われる。

ア 「有能感」について

「有能感」については、肯定的に回答した

94.2%の内、「4 そう思う」と回答した受講者が27.5%と、他の視点に比べ低い結果となっている。これは、自校の課題解決をするためには、管理職をはじめとする他の職員とも協議し、協働して取り組む必要があることから、自分の力で解決することへの難しさを感じたのではないかと考える。また、実践に取り組む際に予想される様々な阻害要因への対応が具体的にイメージできなかった受講者も多いのではないかと考える。一方、講座終了時に行った受講者アンケートの「『アクションプラン』の作成に役立ったもの、又、実践意欲の向上につながったものは何か」という問いの回答（項目別に分類したものを図3に示す。）によると、19講座の平均（27.5%）より「有能感」が、15～50ポイント高かった講座に共通してみられるのは、「授業参観」「ビデオ視聴」「製作実習」等の、具体的に授業づくりの指導方法や指導技術が理解できた点を挙げている受講者が多いことである。課題解決に向けての具体例や好事例を多く取り上げ、これならできそうだと感じさせる工夫が必要であると考えられる。

イ 「関係性」について

「関係性」についても、「4 そう思う」と回答した受講者が38.9%と低い結果となっている。19講座の平均より、10～40ポイント高い講座も5講座あるが、先述した「有能感」のように、受講者アンケートからは、特に5講座に共通にみられる点はなかった。指導者対象の事後アンケートを見ると、「関係性」について、講座担当者が「受講者相互の関係性」と捉えて工夫を行っており、「所属校の教職員集団の中での関係性（教職員集団の中で課題解決に向けた役割を果たすことができる等）」を高めることを意識した工夫はあまり見られなかった。そのため、受講者が、所属校の他の教職員と協働して課題解決する際の自身の役割を意識することが十分できなかったのではないかと考える。また、一授業や一単元を意識して、教職員に必要な授業づくりにおける基礎的・基本的な指導方法や指導技術の育成をねらいとする講座においては、「関係性」まで視点を広げて講座を実施することが難しいと考える。

ウ 「アクションプラン」作成に役立った講座内容等について

図3を見ると、多くの受講者が役立ったと回答している項目の順は、「演習」「講義」「協議」であり、ついで、「授業参観」「実践報告」であった。一方で「振り返り」は、ほとんど記述が見られなかった。これは、「振り返り」について、「各コマの

振り返り」「研修講座の振り返り（「アクションプラン」作成も含む。）」であることをオリエンテーション等で説明することなく実施したため、受講者にとって何が「振り返り」であるのかが分かりにくかったためと考える。

このことから、受講者が「アクションプラン」を作成するためには、講座担当者は、「協議」や「振り返り」だけでなく、「講義」「演習」等の中においても、「四つの視点」を意識した工夫をすることや、それぞれのコマの最後に短時間でも振り返る場面を設けることが必要であると考えます。

(2) 受講者対象の事後アンケート

「講座で学んだことを自己の実践に生かしたか」という質問項目の回答の集計を図4に示す。

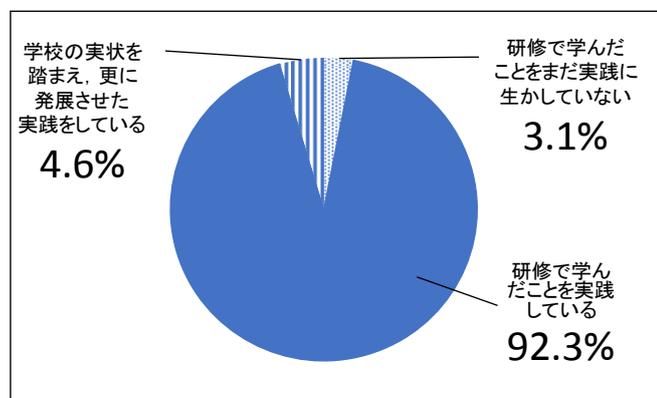


図4 講座で学んだことを自己の実践に生かしたか n=323

図4に示したように、受講者の92.3%が研修で学んだことを実践しており、学んだことを更に発展させた実践を行った受講者も4.6%いる。なお、まだ実践に生かしていないと回答した受講者が3.1%（10人）いるが、実践に生かしていない理由を詳しく見てみると、「今後（12月、3学期等）実施予定」である受講者が8人、「兼務のため、実践する時間がとれていない」1人、「時間がなく実施にいたっていない」1人であった。「今後実施予定」と回答した受講者を含めると、ほぼ100%の受講者が自律的な実践ができていると考える。

次に、「実践している」「更に発展させた実践をしている」と回答した受講者の具体的な実施内容を図5に示す。

図5に示したように、受講者の82.7%が、講座終了時に作成した「アクションプラン」に従って実践している。「アクションプラン」と「アクションプラン」以外に更に自律的に実践している受講者5.4%を合わせると88.1%の受講者が「アクションプラン」を基に自律的な実践をしていることから、

「アクションプラン」を作成することは、自律的な実践を促すために有効であると考えます。

また、事後アンケートの提出を依頼したことも、受講者に自律的な実践をより意識させることに繋がったと考える。

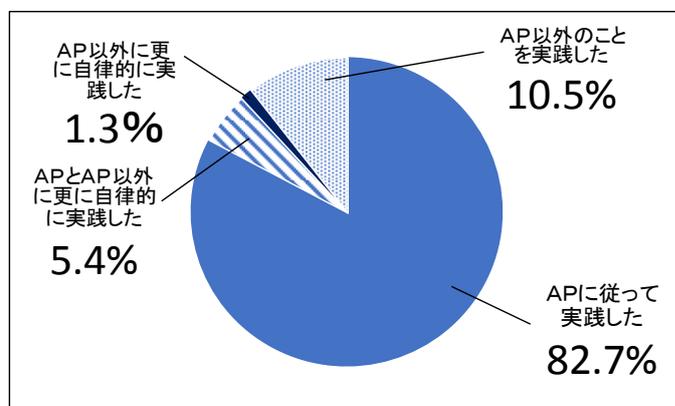


図5 実施内容 n=313 ※APは「アクションプラン」

「アクションプラン」以外のことを実践した受講者10.5%（36人）の講座終了時に作成した「アクションプラン」と具体的な実践内容を比較してみると、校内や教科内で研究授業や授業交流等を実施するよう計画していたが、個人の日々の授業改善での実践になっている、又、具体的な場面や授業を想定して計画していたが、別の場面や授業での実践になっているものも多く見られた。「アクションプラン」を作成する際に、学校全体に係るものだけでなく、個人で実践できるものも考えておくことが必要だと考える。

さらに、「協議」「協議における振り返り」「アクションプランの作成」「作成したアクションプランの交流」「その他」の5項目を示し、「自律的な実践を進めていく上で役立つものは何か」という質問の回答を集計したものを図6に示す。

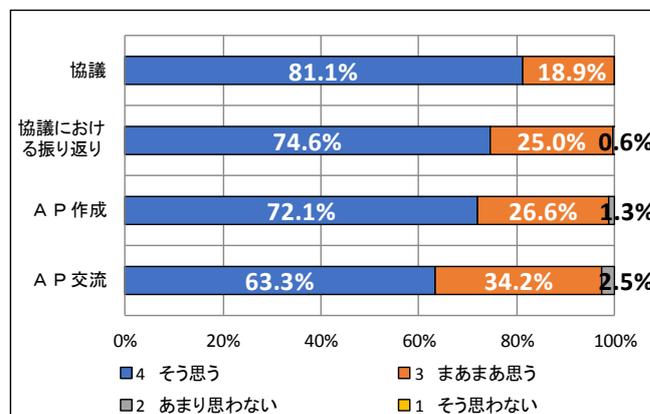


図6 自律的な実践を進めていく上で役立つもの n=323

図6に示したように、受講者のほぼ100%がすべての項目において肯定的な回答をしている。特に、「協議」は、そう思うと回答した割合が一番高い。協議が役立つと捉えている受講者が多い理由として、指導者が協議に関して「四つの視点」を工夫して実施することで、受講者が協議を通して、今までの知識や経験を基に自分で考えたことを発言したり、他の受講者とともに課題を解決できたりしたことが、「有能感」や「関係性」を高めることに繋がり、自律的な実践を進めていく上で有効であったからだと考える。

以上のことから、受講者の自律的な実践を促す上で、「協議」「協議における振り返り」「アクションプランの作成・交流」は、有効であると考えられる。

2 指導者対象の事後アンケートについて

研修講座終了後、①「四つの視点」に係わって指導者が有効だと感じた点、②課題である（難しい）と感じた点、③「四つの視点」以外に自律的な実践を促すために必要だと考えること、の3点について、講座を実施した指導者に事後アンケートを実施した。

指導者の事後アンケートからは、受講者の内発的動機づけを高めるためには、表10に示したように、「協議・協議における『振り返り』」の際には、事前アンケートの効果的な活用や協議テーマの工夫、ねらいに応じたグループを編成することが有効であると言える。また、「研修のまとめとしての『振り返り』」の際には、ポイントを絞った交流をさせることや研修の最後のコマの「協議における『振り返り』」と「研修のまとめとしての『振り返り』」を関連させることが、実践に向けた具体的な「アクションプラン」を作成することに繋がることが分かった。

一方で、次頁表11に示したように、グループ編成や協議や振り返りの時間の確保についての課題が多く挙げられている。講座設計をする際に、振り返りの時間を確保したり、講義や協議等のコマごとに振り返りを行い、メモ欄を活用することで、研修最後の振り返りとの関連を図る等の工夫を取り入れることが必要であると考えられる。また、より効果的なグループ編成にするためには、受講者の校種や職種、経験年数等を事前に把握しておく必要がある。そのためには、今後、専門研修講座の申込時にそれらの項目を必須項目としておくことも必要であると考えられる。

表10 「四つの視点」に係わって指導者が有効だと感じた点

視点	協議・協議における「振り返り」	研修のまとめとしての「振り返り」
知的 好奇心	<ul style="list-style-type: none"> 事前アンケートの回答結果を一覧にして、参加者全員の考えを視覚的に捉えられるようにしたことで、受講者の興味・関心を高めることに繋がった。 ワールドカフェ方式による協議では、他校における取組をより多く共有できたため、受講者の関心を高めることに有効だと感じた。 新学習指導要領で求められている「主体的・対話的で深い学び」を促す授業づくりについて考えるテーマだったため、協議することの意義を受講者が感じていた。 	<ul style="list-style-type: none"> 各グループが作成した題材指導計画について、キーワード（①主体的な学び②対話的な学び③深い学び）を基に発表させたことで、聞き手にとってはポイントを絞ってアイデアを持ち帰ることができた。
有能感	<ul style="list-style-type: none"> グループの編成に際し、事前に把握した教職経験年数に基づき、ベテランと経験の浅い教員が偏らないようにしたことで、特にベテランの教員は協議の際に主導的役割を果たし、有能感を高めたと考えられる。 グループ協議後の全体交流で、各グループの発表に対する感想（良い点やアドバイス等）を他のグループから発表してもらうことで、更に有能感を高めたと考える。 考えたことを報告したり、アドバイスをもらったりすることで、これならできる、やってみようという意欲をもつことができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 講座全体を通して、主体的に学ぶこと、協働して学ぶことを共通テーマとして協議させた。 「アクションプラン」を作成するだけでなく、それを交流することは有能感を高めることに繋がると感じた。
自己決定	<ul style="list-style-type: none"> 「自分の強みと弱み」という視点で、キャリア・カウンセリングの進め方のポイントを整理することで、一般的なポイントとして捉えるのではなく、受講者が自分事として捉えることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 研修の最後のコマの「協議における『振り返り』」と「研修のまとめとしての『振り返り』」を関連させたことで、実際にに向けた具体的な「アクションプラン」を作成することができ、自己決定に繋がっていた。
関係性	<ul style="list-style-type: none"> 個人で考えた取組内容をグループ内で交流する際、実現可能にするためのアドバイスをし合うことで、自校の課題解決に向けて、自身が果たす役割にも気付くことができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 「アクションプラン」を作成する際に、所属校においてどんな働きかけができるかも考えるように促したことで、所属校における自身の役割を意識することに繋がっていた。

表11 指導者が感じた課題（難しさ）

協議・協議における「振り返り」	研修のまとめとしての「振り返り」
<ul style="list-style-type: none"> ・「協議、協議における『振り返り』」及び「研修のまとめとしての『振り返り』」を分けて講座を設計することが難しかった。 ・グループ編成について（経験年数の差が大きく、編成が難しい。また、積極性にも差があり、グループによって協議の温度差が生まれる。） 	<ul style="list-style-type: none"> ・グループによって、進捗に差があるので時間を確保することが難しい。 ・経験の浅い教員は、自校で他の教員（先輩）と協働的に課題を解決することについて、人間関係などの上で困難を感じている（新しいことをしようとしても理解が得られにくい等。） ・振り返りの時間に個人差があるので、15分の時間設定では、「振り返り」を交流し、更にアドバイスし合う時間の確保が難しい。 ・「協議、協議における『振り返り』」及び「研修のまとめとしての『振り返り』」を分けて講座を設計することが難しかった。

また、「四つの視点」以外に自律的な実践を促すために必要だと考えることとして、次のような点が挙げられていた。

<ul style="list-style-type: none"> ・研修を実践に移し、一定の成果を挙げたという例や具体的な好事例を示す。 ・実践に移す際のモデルを提示する。 ・「アクションプラン」の実行に向けて意欲をもって研修を終えるが、自校で実践に移す際には、様々な阻害要因があることが予想される。それらに対する取組も併せて検討しておく必要がある。 ・受講者が作成した「アクションプラン」に対して、何らかのアドバイスを与えること。 ・「ある程度できそうだ」という見通しをもたせること。計画を細分化して考えさせることで、スモールステップで達成感を感じさせながら取り組ませること。 ・研修前に、この研修で何を学びたいのか、また、自校の課題を明確にすることで、その課題を解決しようという意識をもって研修を受講することが、自律的な実践に繋がると感じた。

「四つの視点」以外に自律的な実践を促すために必要なこと

これらのことから、「協議、協議における『振り返り』」だけでなく、講座の中で、受講者が作成する「アクションプラン」の参考になる具体例や好事例を示したり、交流時にアドバイスを与えたり、自校で実践に移す際に考えられる様々な阻害要因を予想し、それらに対する取組も併せて検討したりする等の工夫も取り入れると、より効果的な専門研修

講座に繋がると考える。

V 受講者の自律的な実践を促す専門研修講座の提案（改善案）

「協議」や「振り返り」等に工夫を取り入れた専門研修講座を実施し、受講者や指導者のアンケート結果の検証から、平成31年度研修講座の企画・立案に係る基本方針において、指導者に対し、次のような「受講者の自律的な実践を促す工夫」を示す。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーションの改善を図る。 ・自律的な実践に繋がる「協議」となるよう改善を図る。 ・「講義」「演習」「協議」等の終わりに、適宜「振り返り」を取り入れる。 ・「研修のまとめとしての『振り返り』」の改善を図る。 |
|--|

「受講者の自律的な実践を促す工夫」

1 オリエンテーションの改善を図る

受講者の自律的な実践を促すためには、大人の学びの特徴「P-MARGE」（表1）を踏まえ、講座全体が受講者の問題解決的なものになるようにすることが有効であった。そのためには、オリエンテーションにおいて、各講座の趣旨やねらいの説明だけでなく、受講者の課題意識を明確にさせておく必要がある。

そこで、次頁図7に示すようなシートを用い、受講者の課題意識を明確にさせておくとともに、受講者の「有能感」や「自己決定」等を高めることに繋がる「アクションプラン」を講座の最後に作成すること等を事前に伝えておく必要がある。

なお、「関係性」を高めるために、「アクションプラン」の項目に、「誰を巻き込むのか」「協力を得るために自分がとるべき行動は」という項目を追加するとともに、「有能感」を高めるために、実践する上で予測される困難なことへの対応策を考え、協議できる項目や、「アクションプラン」以外にも更に自律的な実践を行うことを促すために、所属校で実践する前に講座内で作成した「アクションプラン」を再検討できる項目も追加し、更なる改善を図る。

また、指導者が趣旨等を共有するためには、次頁のような口述要領や15分程度の時間を確保しておく必要もあると考える。

アクションプラン(行動計画)シート

○解決すべき自校(又はあなたの)課題は何ですか。

○各コマにおいて参考になった点、大事だと思った点等、「アクションプラン」に生かせると思ったことを自由にメモしてください。

↓

○上記のメモ等を参考にアクションプランを作成してください。

いつ	何のために、何をどのように、どこまで等、具体的に取組むこと	誰を巻き込むのか	協力を得るために自分がとるべき行動は

○アクションプランを実践する上で予測される困難なことを挙げて、その解決策を考えてください。

予測される困難なこと	解決策

↓

【実施前に再検討してみましょう！】計画の修正が必要な場合は、修正案を記入してください。

いつ	何のために、何をどのように、どこまで等、具体的に取組むこと	誰を巻き込むのか	協力を得るために自分がとるべき行動は

図7 専門研修講座に取り入れる「アクションプランシート」

当センターでは、受講者の皆様が、専門研修講座において学んだことを自律的に学校で実践していただけるような研修を目指しています。

当センターが目指す「受講者の自律的な実践」とは、「自ら立てた計画や目標に従って、所属等での実践に活用すること」と定義しています。

そのためには、講座のはじめに、学校又は皆様の解決したい課題を明らかにし、講座の最後「研修のまとめと振り返り」の中で、受講後に所属校で実践することを表明する「アクションプラン」を作成し、交流することが有効であることが分かりました。お手元の「アクションプランシート」をご覧ください。本日の講座の最後「研修のまとめと振り返り」の中で、このような「アクションプラン」を各自で作成していただきます。また、講座の各コマの中で、「アクションプラン」の作成に生かせると思ったことや参考になった点、大事だと思った点等についてメモする欄も設けておりますので、適宜メモをとっていただければと思います。

本日の終日の講座の中で、是非、自校又は御自身の課題を解決するために何が出来るか等、「アクションプラン」の作成を意識しながら、課題意識をもち、主体的に学んでいただければと思います。

口述要領

2 自律的な実践に繋がる「協議」となるよう改善を図る

受講者の自律的な実践を促すためには、研修での学びを現実の問題解決に活用しよう、所属校の課題を解決するために活用しようという実践に繋がる動機づけ、特に内発的動機づけ（やっていること自体に感じる楽しさ、やりがい）が大切であった。そのためには、「四つの視点」を踏まえた工夫を取り入れた「協議」となるよう改善を図る必要がある。

そこで、協議テーマを設定し、表12に示す協議のプログラムの基本型を基に、各セッションのねらいを明確にした協議をデザインする。

表12 提案する協議のプログラムの基本型

各セッションのねらい	成果と関係性のねらい	協議の流れと留意点（四つの視点）
導入 (ゴールの確認)	成果 ・互いを知る。	<ul style="list-style-type: none"> ●協議(問題解決型)のゴールとプロセスの確認 【協議のゴール】○○について考える。 【プロセスの確認】 ①協議前の講義等を想起させ、○○の意義や重要性等を共有する。(全体) ②各校における○○の課題を挙げる。(個人) ③課題を交流し、グループで話し合う課題を決め、その原因と解決策を協議する。(グループ) ④解決策の最良案を決定し、発表する。(グループ→全体) ⑤協議を通しての振り返りを行う。(個人)
インプット	成果 ・意識を合わせる。	テーマ 例：○○するためにはどうすればよいだろうか？
現状認識	成果 ・問題を提起し、必要な情報を共有する。	<ul style="list-style-type: none"> これまでの研修内容を振り返る。(全体) (知的好奇心) ○○における各校の課題を整理する。(個人) ・なぜそれが問題となるのかを踏まえて整理する。 課題をグループで交流し、グループでどの課題について話し合うか決定する。(グループ)
原因探索	成果 ・考え方を理解する。	グループで決定した課題について原因を協議する。(グループ)
解決策立案	成果 ・考えられる解決策をなるべく多く出す。 関係性 ・本音を出させる。	受講者のこれまでの経験や知識を出し合いながら、解決するにはどのような方法が考えられるか協議する。(グループ) (有能感、関係性)
意思決定	成果 ・どれを実行するか決める。 関係性 ・全員が当事者として決意する。	協議した解決策のうち、最良案を決定する。グループで協議した課題・原因・解決策をまとめ、発表する。(グループ→全体) (有能感、自己決定、関係性)
振り返り	成果 ・成果を確認する。	協議を通しての振り返りをする。(個人→グループ) ※「アクションプラン」のメモ欄に記入する。

↓

研修のまとめとしての「振り返り」…「アクションプラン」の作成→交流

表12に示したように、協議の始めに、協議前の講義や演習等を想起させ、協議の意義や重要性等を共有させることで、受講者の「知的好奇心」を高め

たり、協議の最後には必ず、個人による「振り返り」と交流を設定し、受講者の「有能感」「自己決定」「関係性」を高めたりするようにする。また、グループ協議を行う際は、校種や職種、経験年数等を考慮して編成したり、協議や交流する際に、メンバーを変えたりなどして「関係性」を高めたり、肯定的な雰囲気づくりを図ったりする必要がある。

さらに、解決策を考える際には、実践に移す際に考えられる様々な阻害要因も予想し、その対策も講じるようアドバイスする工夫や、意図的に他のコマの中で、受講者が作成する「アクションプラン」の参考になる具体例や好事例を示す工夫も「有能感」「自己決定」「関係性」を高めるために有効である。

3 「講義」「演習」「協議」等の終わりに、適宜「振り返り」を取り入れる

受講者の自律的な実践を促すためには、「協議における振り返り」が有効であった。つまり、自己の学びを振り返らせ、何を学んだのかを明らかにさせたり、自己の実践に何が生かせるのかを考えさせたりすることが大切だということである。

そこで、「協議」だけでなく、専門研修講座における「講義」や「演習」等においても、それらの終わりに、「振り返り」を適宜取り入れ、自己の学びを振り返らせる時間を意図的に設定することが必要であると考ええる。

そのためには、講座を設計する際に、一方的な「講義」として設定するのではなく、双方向のやりとりができる「講義・協議」として設定したり、「講義」の後に、講義の内容をもとに協議や演習等ができるように、1日の講座内容を設計する等の工夫をしたりしておく必要がある。また、「振り返り」の時間を十分に確保した時間設定をしておくことも欠かせないと考える。

4 「研修のまとめとしての『振り返り』」の改善を図る

受講者の自律的な実践を促すためには、研修全体の内容を思い起こさせ、「この研修で学んだこと、気付いたことは何か、職場に戻ったときに研修での学びを何に活用するか」等を受講者の言葉で表現させ、その実行を約束してもらうための意思表示・遂行支援ツールとして「アクションプラン」を作成し、作成後に受講者同士で交流させることが有効であった。

そこで、「研修のまとめとしての『振り返り』」では、オリエンテーションで明確にした受講者の課題を想起させ、適宜設定した「振り返り」や「アクションプラン」のメモ欄への記述を参考にしながら、「アクションプラン」を作成させる。その際、「アクションプラン」を実践する上で予測される阻害要因とその解決策も併せて考えさせておくことで、受講者同士の交流の際に、「アクションプラン」の妥当性等を比較吟味することを通して、他の受講者に認めてもらい、「有能感」を高めたり、他の受講者の意見を聞くことで、新たな気付きや共通点を発見したりすることもでき、「関係性」が高まると考える。

なお、最後のコマに「協議」を設定しておき、その協議の中の「協議における『振り返り』」と関連させることも効果的である。

VI 研究の成果と今後の課題

本研究での成果は、大人の学びの特徴を踏まえ、内発的動機づけ等に着目し、受講者の自律的な実践を促すための効果的な研修の在り方について明らかにしたことである。具体的には、「知的好奇心」「有能感」「自己決定」「関係性」の「四つの視点」を取り入れて、「協議」や「振り返り」を工夫して実施することや、自校（又は自身）の課題解決に向けての「アクションプラン」を作成すること等が、受講者の自律的な実践を促すことに有効であることが分かった。

また、受講者や指導者アンケートの結果を踏まえ、より受講者の自律的な実践を促す専門研修講座の改善策を提案することができた。

今後は、当教育センターにおける専門研修講座において、提案した改善策を実施するとともに、事後アンケート（提出は任意）等で自律的な実践を促すよう働きかけるとともに、専門研修講座や「アクションプラン」が、自律的な実践に繋がっているかを検証し、更なる改善を図っていきたいと考えている。そして、専門研修講座での成果を踏まえ、指定研修や推薦研修等へも広げていきたいと考える。

おわりに

平成29年の教育公務員特例法一部改正により、都道府県教育委員会等に対して、教員の職責、経験及び適性に応じて向上を図るべき資質に関する指標、協議会及び指標を踏まえた教員研修計画の策定が義務付けられた。本県においても、平成31年度末まで

に育成指標を完成させ、指標に基づく研修体系を構築するための取組が着実に進められている。

指標に基づく研修体系等の構築と並行して、研修における学びが、受講者の自律的な実践に繋がるものとなるよう工夫し、改善策を継続的に模索することは、教育センターをはじめとする研修実施機関の責務であることは言うまでもない。中央教育審議会は、「答申」において、研修に関する改革の具体的な方向性として、講義形式の研修からより主体的・協働的な学びの要素を含んだアクティブ・ラーニング型研修への転換を図っていくことや、学び続けるモチベーションを維持できる環境整備等が重要であると述べている。受講者の自律的な実践に繋げるための手立てを、研修講座の流れの中にしっかりと組み込んでいくことができるよう、本研究において示した、協議や振り返りにおける工夫をはじめとして、引き続き改善に向けた取組を進めていきたいと考える。また、専門研修講座等の校外における個人の学びを、所属校における校内での学びにどう結び付けることができるか、校内研修の在り方を含め、さらに研究を進めていきたいと考える。

最後に、本研究を進めるに当たり、研究指導者として一年次から熱心に御指導いただいた広島大学大学院教育学研究科の米沢崇先生に心より感謝申し上げます。

【引用文献】

- 1) 中央教育審議会（平成27年）：『これからの学校教育を担う教員の資質向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）』p. 2

【参考文献】

- 文部科学省（平成29年告示）：『小学校学習指導要領』
 広島県教育委員会（平成26年）：「広島版『学びの変革』アクション・プラン」
 中原淳（2006）：『企業内人材育成入門』ダイヤモンド社
 外山美樹（2013）：『行動を起こし、持続するカーモチベーションの心理学―』新曜社
 大照完（1950）：『教師のワークショップ―参加・計画・指導のために―』教育問題調査所
 堀公俊（2006）：『ファシリテーション入門』日本経済新聞出版社
 鈴木克明（2015）：『研修設計マニュアル―人材育成のためのインストラクショナルデザイン―』北大路書房
 中原淳（2014）：『研修開発入門―会社で「教える」、競争優位を「つくる」―』ダイヤモンド社
 中原淳他（2018）：『研修開発入門「研修転移」の理論と実践』ダイヤモンド社
 中野民夫（2001）：『ワークショップ―新しい学びと創造の場―』岩波新書
 堀公俊・加藤彰（2008）：『ワークショップ・デザイン』

改善した「協議」や「振り返り」を取り入れた専門研修講座

◎本研究で定義する「自律的な実践」とは、「自ら立てた計画や目標に従って、所属校等での実践に活用すること」
→個人の実践、学校全体としての実践（校内の研修・実践へ還元）に活用する



実践につながる動機づけ（現実の問題解決に活用しよう、所属校の課題を解決するために活用しよう）、特に内発的動機づけ（やっていることに事態に感じる楽しさ、やりがい）が大切

《改善した「協議」や「振り返り」にするために》

講座全体、「協議・振り返り」で重視！

受講者の「知的的好奇心」「有能感」「自己決定」「関係性」の四つを視点に「協議」及び「振り返り」を工夫して実施する

- ・「知的的好奇心」…新しいことを学ぶこと自体に感じる面白さや興味、やることの意義・価値・重要性、興味深さ
- ・「有能感」…自分はできる能力があると感じることへの欲求、課題解決を図る力が自分にはあると実感することができる
- ・「自己決定」…自分で選び、決めることができる、自分でやろうと思って始め、終わりを自分で決めることができる
- ・「関係性」…他人と互いに尊重し合える関係を結びたい、愛情や尊敬を受けるに値する存在でありたいという欲求、教職員集団の中で課題解決に向けた役割を果たすことができる

※「講座の中で目指す協議」とは、

学校現場の日々の課題が持ち込まれ、その解決に向け、受講者が知識や経験、専門性を認め生かし繋ぎ解決しようとし、その解決策を明日の実践に生かす

協議を通し、受講者が今までの知識や経験を基に自分で考えたことを発信し、他の受講者とともに課題の解決を図る



①協議テーマを設定する

- ・質問文の形式で問う、答えやすい問いから深く考えさせる問いへと展開

②協議のプログラムの基本形（問題解決型等）を基に、「成果」「関係性」のいずれかが各セッションのねらいとなるようデザインする

- ・「成果」…意識を合わせる、問題を提起する、体験をする、考え方を理解する、可能性を洗い出す、成果を確認する
- ・「関係性」…互いを知る、考え方を知り合う、一体感を高める、本音を出させる、相違点を発見する

③各セッションのねらいを短い言葉でわかりやすく明確に示す

問いかけて、気付かせる！

④協議の最後に必ず「振り返り」を設定する（アクションプランシートの「O各コマのメモ欄」に記入する）

【振り返り例】

- ・沈黙…協議で起こったことを、考えたことを書き出す
- ・私の宣言、公約…明日からやろうと思ったことを宣言→協議で得た気付きを見つめ、自分にとっての意味を考える
- ・KPT…続けるべき良い点を書き出す、改善が必要な問題点を洗い出す、対策を含めてやっていきたい点をあげる

【振り返りにおける働きかけのフレーズ】

- ・気付きを与える、気付きを分かち合う、意味を考えさせる、学びを一般化する、応用を考えさせる、実行を促す

⑤一日の研修のまとめとしての「振り返り」の中でアクションプランを作成し、妥当性を比較吟味する時間（交流）を設ける

- ・研修全体の内容を思い起こさせ、「この研修で学んだこと、気付いたことは何であったのか」を学習者の言葉で表現させる → アクションプランを作成する → 交流する

講座番号() 講座名「 」講座
 所属(立 学校) 氏名() 作成日:平成 年 月 日(), 月 日()

アクションプラン(行動計画)シート

○解決すべき自校(又はあなた)の課題は何ですか。

○各コマにおいて参考になった点, 大事だと思った点等, 「アクションプラン」に生かせると思ったことを自由にメモしてください。



上記のメモ等を参考にアクションプランを作成してください。

	いつ	誰が, 誰と, 誰へ	何のために, 何をどのように, どこまで等, 具体的に取り組むこと
1			
2			

○研修講座終了後に, それぞれ該当するものに○印を記入してください。

項目	そう思う	まあまあ そう思う	あまり そう思わ ない	そう 思わない
・自校での今後の実践に向けて, 本研修の内容は興味深く重要なものであった。				
・自校(又はあなた)の課題の解決に向けて, 今後の実践内容や行程等を自分なりに決めることができた。				
・自校(又はあなた)の課題を自分達で力で解決できそうだ。				
・今後, 教職員集団の中で, 他者と協働し, 課題解決に向けた自らの役割を果たせそうだ。				

◆本研修において, アクションプラン(行動計画)の作成に向けて役立ったものは何ですか。又, 実践意欲の向上につながったものは何ですか。具体的に記述してください。

専門研修講座【308教育法規「基礎から学べる！スクールコンプライアンスの確立と教育法規」講座】
 についての事後アンケート

所属		氏名	
		アンケート 記入日	平成 年 月 日

このアンケートは、教育センターが行っている研究の資料とするものです。講座内容の所属校での活用状況を把握し、今後の講座内容の改善に役立てるために使用します。御協力くださるようお願いいたします。

以下の問1～4にお答えください。

問1 講座で学んだことを自己の実践に生かしましたか。ア～ウのうち、該当するもの一つを選び○を記入してください。

ア 研修で学んだことをまだ実践に生かしていない。	イ 研修で学んだことを実践している。	ウ 学校の実状を踏まえ、研修で学んだことをさらに発展させた実践をしている。

問2 問1でアに○を記入した方は、その理由を教えてください。

--

問3 問1でイ又はウに○を記入した方に質問します。

(1) 具体的にどのような内容を実践しましたか。該当する番号を○で囲んでください（複数回答可）。

- ①講座終了時に作成したアクションプラン（行動計画）に従って実践した。
- ②講座終了時に作成したアクションプラン（行動計画）以外にさらに自律的に実践した。
- ③研修内容を授業改善や業務改善に生かした。
- ④研修内容を踏まえ、校内で活用できる資料等を作成した。
- ⑤研修の資料等を活用し、校内で教職員対象の研修を実施した。
- ⑥研修の資料等を活用し、校外（他校との合同研修、教育研究団体等）で研修を実施した。
- ⑦その他（例 保護者や地域住民への啓発 など）

(2) ○を付けた箇所について、具体的な内容を教えてください。

(例)

--

問4 「自律的な実践」を進めていく上で、以下の内容は役に立つものだと思いますか。

	内 容	そう思う	まあまあ そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない
1	協議				
2	協議における振り返り				
3	アクションプラン（行動計画）の作成				
4	作成したアクションプラン（行動計画）の交流				
5	その他（ ）				

